

Michihiro Matsuo 松尾 道洋



魚を獲る手段は無限の広がりを見せる。同じフィールドでロッドを振り続ける中で見えてきたもの。

ウェーディングを始めて今年で何シーズン目になるだろうか。活動年数としては決して長くはないが、考えてみると釣り人生の半分ほどを河川のズズキと過ごしてきたことになる。そしてそのキャリアのほとんどを、地元の広島河川中心に費やしてきた。普段あまりこういうことは考えないのだが、釣りにまつわることで過去や将来を考えて文章を書いてみると、リリースしてきた魚のことを否応無しに考える自分が居ることに気が付くものである。

ひとくちにキャリア15年とか20年とか口にするが、その頃に放たれていったシーバスはどうに寿命を迎え、新たな子孫を残しているだろう。その子孫の中には立派にランカーサイズへと成長し、今シーズン再び誰かのロッドを曲げてくれた魚がいるかも知れない。そういうサイクルを考えると、今出来る思考力を得たということは、僕もベテランの域に入ってきているということになる。

この地に根を張っているからと言えはそうなのだが、それほど広島というフィールドはシーバスを追いかける上で条件が整っていると言える。内陸を見れば複数の大規模河川が海へと注ぎ、ひとたび海へと目を向ければ瀬戸内に浮かぶ島々が複雑な潮流を生み出し、尾鰭の発達した強い魚を育て上げてくれる。特異的な干満差も魚とのファイトを強くする様々な要因を手伝っており、こうした環境で行われるシーバス釣りは全国的にも珍しく魅力的に映ることは間違いないだろう。それを証拠に近年では他県からの遠征アングラーも増え、ハイシーズンである初秋から初冬にかけての広島市内河川は連日のように賑わいを見せており、エリアとしての注目度は非常に高いものがある。四国や九州とは違い、陸続きである本土に存在しているというアクセス面の良さも広島の魅力の一つだろう。

ただし残念な部分としては、今現在ほぼ「地域差が生む魅力」が優先され一人歩きをしている状態であること。それぞれが地元で培った経験を試すことを目的としての釣り、あるいは遠征で得たことを自らホーム河川へとフィードバックさせるという根底の部分が見えず、マナーの低下も言える。これは一部の地元アングラーにも言えることだが、ただ魚を競い合っている行為だ

けでなく、アングラーとしての考えが成熟されるにはもう少し時間が掛かりそうである。

さて、僕自身これだけ長く市内河川に浸かりながらも、まだまだやり切れていないことがいくつもある。抽象的な部分では、都会的な釣りから自然とシンク口した釣りまで。具体的にポイントひとつをとっても、上流域と河口域の釣りは大きく違し、潮汐や地形が絡むとシーバスを釣る為の手段は底なしに広がりを見せてくれる。これはどの地域でも言えることではあるが、先に書いた様に特異的な広島においては、その広がりには間違いなく一般的な他のエリアを凌駕しており、非常にありがたいことに終わりが全く見えないのである。おまけに、現在広島には市内河川を横断する形で、河口部に新しい橋が架けられている最中であり、街灯が灯るまでに完成すれば、慣れ親しんだ現在の河口域のフイッシングシーンも、また大きく変わる事が予想される。

こうした現状を考えると、恐らくこの先何年浸かり続けても、やりきったという満足感を得て他の地に目を向けることは無いのではないかとと思う。これだけやっても成長させてくれる恵まれたフィールドが基盤としてあるからこそだが、それよりも何よりも、とにかく僕は地元である広島市内河川に浸かり、暑くとも寒くとも黙々とロッドを振るといふ行為が好きなのである。

